

タイトル	幻想の『北海学派』：さあれ去年の雪, 今, 何処?
著者	千葉, 宣一
引用	北海学園大学人文論集, 26・27: viii-x
発行日	2004-03-31

幻想の『北海学派』 —— さあれ去年の雪，今，何処？ ——

千 葉 宣 一

当時、北海学園が刊行していた総合文化雑誌、『北海道から』は、人文学部の新設を巡り、「北海学園大学人文学部のすべて」を特集し、別冊を1993年1月に編んだ。

私は、「北海学派の生成を」を寄稿し、その初心！ は今も変わらないので、ここに引用して置こう。

《“比較文学”は若く美しい雄大華麗な学問です。E・R・クルツイスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』（南大路振一他訳、みすず書房）や、P・アザールの『ヨーロッパ精神の危機』（野沢協訳、法政大学出版局）、D・キーンの『日本人の西洋発見』（芳賀徹訳、中央公論社）などは、最良の水先案内の書として、問題意識を喚起し、さわやかな知的興奮のシャワーを浴びせてくれることでしょう。

R・エチャンブルは、比較文学こそ、ユマニズムであると規定し、比較文学を研究する学徒の血肉化すべき学的モラルは、あらゆる独善的な国粹主義と偏狭な地方主義とを克服すること。何千年も昔から、価値の相互交換を行ってきた人類の文明は、常にこの交換に注目しなければ、理解したり、味わったりできないものであり、斯かる交換現象の複雑性は、どんな人間に対しても特定の言語、特定の国家を特権的なものにし、それとの関連によって、学問を秩序立てることは許されぬということを再認識することから、比較文学の一切が開始されるのだと主張しています。

かつて、日夏耿之介は、日本の近代文学史は西欧文学の影響史でもあると診断し、島田謹二もまた、明治・大正・昭和の新しい文学が、西欧の近代文学の出店のようなものであり、西欧文学の伝統を日本化しようと、も

がいた苦闘の記録に外ならぬと断言しました。斯かるコロニヤル・コンプレックスから生まれたコスモポリティズムは結局、空虚で不毛です。

日本の精神の風土に深く存在の根を降ろした日本文化のジェネラリストであってこそ、比較文学のスペシャリストとして、世界文学の一環としての日本文学の民族的特質や国際的普遍性の存否を洞察できるのです。この意味に於いて、本学の多彩な教養科の学習に静かなる情熱を注いで下さい。

私は、国際交流基金や、フルブライトの基金で来日した、コロンビア大学博士課程や、ハーバード大学博士課程の院生達に、「一九三〇年代の日本の戦争文学」や、「日本の前衛詩運動」を指導し、一方、北京日本学研究中心では、中国の学徒に、「日本の近代文学研究の方法的諸問題」や、「戦後文学の思想と方法」を担当したことがあります。

この教育体験を通して覚醒した最大の教訓は、今後、日本の比較文学研究が志向すべき課題は何か？ それは文学の研究交流を巡り、西洋に向かって東洋文学を、東洋に対して西洋文学を媒介し、世界文学の三極還流に中心的役割を果たすことなのだと思います。

日本文化学科の学風は、一期生の使命感と知的創造力がその方向係数を決定することでしょう。

私は、皆さんと一緒に内村鑑三の、“How became a Christian” や、新渡部稲造の “Bushido The Soul of Japan” 1899、岡倉覚三の “The Book of Tea” 1906 などを輪読しながら、彼等の思想形成のパントノミーや根源的な文明批評の意義を分析し、何故彼等を凌ぐ国際的知識人が生まれなかったかを考えたいと思います。やがて皆さんの中から、例えば、ニュルンベルグ裁判を支配した論理や倫理と、東京裁判のそれとを実証的に比較研究し、戦争と平和の総合科学を構想するような、フランクフルト学派等を超える“北海学派”生成の担い手の誕生を期待しています。

原理に従って夢を見、理知に據って狂う、知的青春の出発を心から祝福します》と。

だが、運命の偶然で、天安門事件の起こった秋から、北京日本学研究中心の客員教授に招かれ、日本文学研究の方法論や戦後文学の思想や方

法を講義し、また、中国中日関係史学会主催の、「東方文化与現代化」を中心テーマとした国際学術検討会で、「進化論と日本の近代化」を発表したり、人民解放軍芸術学院で、「二十世紀の戦争文学とアバンギャルドスム」を講演したり、「三島由紀夫国際検討会」を、社会科学院日本研究所の葉渭渠教授やコロンビア大学のD・キーン教授と共催し、武漢大学や北京大学で実現するなど、何れも、紹興酒に酩酊しながら、二次会、三次会と、公式主義や、教条主義的対話ではなく、本当に語り合いたいことを言い、質ねたいことを尋ね、激論を闘わせているうちに、無理が重なって、ある冬の朝、意識を喪失し、インフェノルノに直行する羽目に陥りました。目が覚めた日、病院の窓から降りしきる雪を眺めて、来年は、もう、この雪を見る事も、中国の学友達とも再会することもないだろうという思いに襲われました。

さあれ、去年の雪、今、何処？

北海学派の発展の可能性は無限です。だが、不可能性も、また、無限です。

半分、死人として、老醜を晒してきた私であるが、志は千里の彼方に在り。海鳴りのように悔しい嘆きのみが、常に永劫回帰します。

皆さん、ありがとう。人文学部の明日を信じています。